

教養主義の盛衰

はじめに

教養主義については、旧制高等学校と関係して、すでに本にまとめたので、きょうは戦後日本社会の中での教養主義の盛衰を考えます。

教養主義は全共闘世代から上の世代の人にとっては自明の言葉ですが、若い先生にとっては必ずしも自明ではないかもしれません。簡単に定義すると、レジユメの二枚目の「はじめに」に書いてあります。歴史、哲学、文学などの人文系書籍の読書による人格形成主義ということで、明治四十年代の旧制高等学校のキャンパスに始まり、いわゆる大正教養主義として結実し、やがてマルクス主義と反目共依存関係を取りながら一九七〇年くらいまでの大学キャンパスに続いたエリート学生の学生規範文化だったと、一応は定義できると思います。

ここでは教養とは何かではなく、教養主義について考えたいということです。マックス・ウェーバーが、「教理ではなく、現実に人々

がどのように受け取ったか、それに基づいてどのように行動したかを研究する」ことをプロテスタンティズムの倫理の中で言っています。

きょうは野田宣雄先生（南山大学総合政策学部教授）もいらして非常に恥ずかしいですが、教養ということになれば、野田先生のような人がお話ししないといけないと思います。しかし、教養豊かでないから教養主義にあこがれるのだろうと思います。教養主義なら私みたいなスノビッシュな者でもいいのではないかという意味で、教養主義という方向で考えます。

先ほど言いましたように、教養主義は主として旧制高等学校を舞台として、大正教養主義として有名です。ある意味では、戦後の大学は、昭和初期の大学キャンパスがもう一回よみがえったのではないかと、最近つくづく思います。これは一方で教養主義です。

それから一方でマルクス主義は、少なくとも私の大学時代までは、キャンパスの中ではウェイトが大きかったわけですが、教養主義という、すぐ旧制高校とか第二次世界大戦の前を考えますが、戦

教養主義の盛衰

後日本社会の中で、昭和初期的なキャンパス・カルチャーが再現したと私は思います。ですから、教養主義はマルクス主義と同伴して、マルクス主義も教養主義的なマルクス主義でした。そういう意味では、ある時期まで、マルクス主義的教養主義、あるいは教養主義的マルクス主義とでもいうキャンパス・カルチャーがあつたということだと思えます。

教養とインテリが輝いたとき

私は昭和十七年に生まれで、六十一歳になつたところです。私の生年月日は小泉首相と同じ昭和十七年一月八日です。私自身が、考えてみるともう歴史社会的存在です。資料を読まなくてもなんとなくわかるということで、歴史社会学は便利だと思えます。私が「いや、そのときはそうじゃなかったようだ」と資料を調べなくても、自分を振り返るとなんとなくわかるような気がします。

私自身の青春時代を思い返すと、あのころは非常に輝いていたのではないかと思います。冒頭に話したように、戦後社会の中に教養主義あるいはマルクス主義が、戦前以上に大衆的に復活というより大きな規模で盛り上がったと思うので、少し私自身のことを話しながら、そんな時代の雰囲気、若い先生にわかつていただきたいと思います。

私が中学校三年の時の話をします。今から四十六年ぐらゐ前です。中学校三年の時は一九五六（昭和三十一年）年で、前年がいわゆる五

十五年体制です。一人当たりのGNPが戦前水準に達したときです。この年の経済白書が「もはや戦後ではない」です。私の家は田舎にありましたが、そのころ蛍光灯がついたような気がします。そして、裸電球はトイレや物置など、そういう所に限られるようになったのです。

M先生

そんな時、私の家に新制高等学校の独身の先生が、次の下宿が決まらないので、しばらくの間下宿しました。M先生です。旧制の富山高校の出身で、ちょうど新制の切り替わりだったので、新制の富山大学を卒業して、私が住んでいる町の数学の先生として赴任しました。

びっくりしたのは、この先生がたかさんの本やレコードを持っていてたことです。今の水準から言えば、そうでもないですが、当時の田舎の水準で言うと、たかさんの本やレコードを持っていたのです。当時は普通下宿といえれば一部屋でしたが、この先生は蔵書とかレコードとかが多かったので、もう一つの部屋も使っていました。二部屋使っていたのは珍しいことです。

なんとなく、この先生の部屋は当時の田舎の雰囲気とは違っていました。今から振り返れば、これが旧制高校的教養主義の香りというものかもしれません。この先生から、いろいろな本を読むことを薦められました。最初はルナールの『にんじん』を読めと言われま

した。それから芥川龍之介の短編小説や岩波文庫です。先生から「本を読んでどうだったか」と聞かれました。高等学校になると『三太郎の日記』『善の研究』などを薦められました。『三太郎の日記』『善の研究』は読んで、さっぱりわかりませんでした。今の学生は、読んでわからないと書いている人が悪いと思うのでしょうか。でも、私は自分の頭が悪いとは思いませんでした。大学に入れば、こういうものをすらすら読めるようになるのだろう、すらすら読める世界は非常に楽しいと思つたのです。しかし、大学に入って読みましたが、あまりわかりませんでした。

雑誌『世界』

この先生は私にとって、いろいろな意味でいい先生でした。進学指導にも熱心だったので、毎月『蛍雪時代』を取っていました。中学校の時に、先生が取っている蛍雪時代を時々見ました。今の受験と違って、受験雑誌も何か独特なまばゆい感じがしました。なぜか知らないですが、その先生は同時に、岩波書店発行の『世界』も取っていました。

私が初めて総合雑誌を見たのは、この先生が毎月『世界』を取っていた中学校三年の時です。大江健三郎のエッセイを読んでいたら、彼が『世界』を読んだのは高校二年の時と書いてありました。僕のほうが早いじゃないかと思いました。

当時の田舎の時間や空間から考えれば、あの『世界』の論調は全

く別世界ですから、私は論文はほとんど読みませんでした。グラフィアみたいなものをばらばらと見た程度だったと思います。ただ、こういう雑誌を大学に行ったらスラスラ読めるというのはいいなと思いました。

ところが、私の感じでは、このM先生も『世界』は取っていたけれども、読んだ形跡はほとんどなかったのです。なぜかというところ、ページをめくった跡がほとんど見られなかったからです。M先生から政治的な意見を吹き込まれることは全くありませんでした。だから、この先生が『世界』をなぜ定期購読していたのか、今となってはなぞです。

たとえ読まなくてもこういう雑誌を定期的に買うというのが、インテリたる高校教師の証だったのかもしれないと思います。実際に田舎では、当時、新制高校の先生は大変な文化人で、全国どこでもそうだったかもしれませんが、この町にあった女学校校出のインテリの有閑夫人を相手にした文化サロンみたいなどころの講師は大体新制高校の先生でした。

プチ教養主義者

大学生になったらそういうものを読むものだという刷り込みはされたと思いますが、私は大学に入ってから『世界』を定期購読して、わりとまじめに読みました。そういう意味では、自分のことをプチ教養主義者みたいなものが誕生したのではないかと思います。

教養主義の盛衰

私が大学に入学したのは一九六一（昭和三十六）年です。ちょうど安保闘争が終わって、キャンパスが幾分静かになったころのことです。旧制高校の雰囲気はまだ残っていました。考えてみると、ざっと計算しても、当時三十歳以上の京大の先生は、ほとんど旧制高校を卒業していたことになると思います。

コンパではよく担任の先生のドイツ語の歌を聞いた覚えがありません。また、そういう雰囲気はあつたと思います。寮は旧制高校的なものだったと思います。ただ、特に教育学部とか文学部には一割程度は女子学生がいましたが、非常に新制高校的な京大の女子学生は、旧制高校の歌を歌ったりしていたのを、どういうように感じたのかと、今になって思います。まあ私ごときプチ教養主義者は、キャンパスであまり浮くということはありませんでした。どつちかというところノーマルな感じですね。

『中央公論』

学生運動に参加するのも普通の文化だったわけですが、ただ私は先頭を切って学生運動をやるほどの思想性もないし、度胸もなかったのですが、デモにはよく行きました。京都のデモは四条河原町とか八坂神社のあたりで渦巻きデモをするのですが、大体機動隊にぶつかって殴られるのです。学生のほうが機動隊を殴るのは回数としては非常に少ないです。殴られたりするから、激しく機動隊を憎んだわけです。

ところがだんだん私も、機動隊員だって本当は暴れたいのではないかと思ってきました。機動隊員だって学力優秀で、本当だったら大学に行つて、渦巻きデモをやりたいのではないかと思えます。でも彼らは経済的事情もあり、こうして社会規範にのっとって仕事をしているのです。これは規範ルサンチマン説です。「俺たちだって本当は暴れたい。なのに、こうして守っている。お前らはけしからん」という気持ちではないかと、だんだん自分がやっていることに懐疑的になってきました。

ちょうどそのころ、教養部の生活が終わり、教育学部に進学しました。京大の学生運動は大体その辺から転向が始まります。私もだんだんデモから足が遠のきました。そのころから、だんだん『世界』という雑誌が疎ましくなってきました、『中央公論』を読み始めます。その時の「中央公論」には、少し前に、確か高坂先生が最初にお書きになった論文が出ていたと思います。私の記憶では、私が読み始めたころは、加藤秀俊さんの「無目標社会の論理」という論文だったのではないかと思います。

総合雑誌という教養共同体

今、総合雑誌の話をしました。考えてみると、これはあくまでも教養ではなく教養主義です。学生文化は文学、哲学、歴史関係の古典の読書だけではなく、総合雑誌の講読を通じた面も大きいのではないかと思います。実際、大正時代、昭和戦前期は総合雑誌の時

社会と倫理

代でもありました。総合雑誌のクオリティは非常に高いものでした。総合雑誌を通じて学問のきっかけになったり、あるいは話のネタになったり、一種の教養主義、共同体みたいなものがメディアを通じてあったと思います。

昭和戦前期は、ご存知のように『中央公論』『改造』、それから『経済往来』のちの『日本評論』が代表的な総合雑誌です。これがどれくらい読まれていたかというのは、昭和一三年当時の学生調査を計算してみると、帝大生の三人に一人くらいは読んでいたのではないかと思います。それから旧制高校生や高等専門学校生も五〜一〇人に一人くらいは、さつき言った雑誌などを読んでいたのではないかと思います。

最近たまたま、慶応大学の昭和年代の学生調査を見ていたら、愛読書で総合雑誌をあげた人は回答者の59%です。ところがこの59%というのは、質問に回答した人の半分以上です、回収率は30%です。もともとこの調査に回答しない学生は総合雑誌をあまり読んでいないと考えると、3×6=18で18%。ですから、私がさつき帝国大学の学生の三人に一人くらいは読んでいたのではないかということ、なんとなく計算が合うので、かなり読んでいたのではないかと思います。

余談

余談ですが、読書も面白いので、この間調べました。教養主義の

表門は旧制高等学校ですが、奥の院は文学部だと思います。文学部の学生はやはり違います。あまり総合雑誌は読まないのです。多いのは法学部や経済学部です。文学部の教養主義の奥の院の学生から見たら、『中央公論』『改造』は大衆的な雑誌に見えたのではないかと思います。だから文学部の学生はもちろん『キング』は少ないけれども、同時にほかの学部から比べると『中央公論』や『改造』も少なく、『思想』や『理想』という哲学、思想関係のものが多いというのが出ます。

それ以上は立ち入らないで元に戻しますが、そういう傾向は戦後もあつたわけです。戦後もそういう総合雑誌が非常に花咲いたわけです。これは東大とか京大の特定の大学の学生だけではなく、たとえば一九六五（昭和四十）年、当時の学生調査で、普通の私学の関西大学の読書調査を見ると、『文芸春秋』も入れて『中央公論』『世界』『朝日ジャーナル』『エコノミスト』、この類の雑誌を何人に一人くらい読んでいるかを計算すると、一人で二冊読んでいる場合もありますから、大雑把に言うと、やはり三人か四人に一人くらい読んでいます。もちろん三人か四人に一人で、半分以上は読んでいないけれど、三人か四人に一人くらいが『文芸春秋』『中央公論』『世界』『朝日ジャーナル』『エコノミスト』のような雑誌を読んでいるというのは、やはり今から見たらすごいと思います。

戦後でも毎日新聞ですつと読書調査をやりますが、当時の読書調査で、たとえば『中央公論』とか『世界』とかは一般人の読書ではベストテンなどに当然入ってこないけれど、学生のほうでは上に上

十

教養主義の盛衰

がつているということは、学生独自の文化があったということになるかと思えます。

大久保清事件

それが次第になくなっていくわけですが、ちょうどその境目が大久保清事件ではないかと思えます。考えてみると、あれは本当に教養主義的な事件です。大久保清といっても若い先生はわかりにくいかもしれませんが。一九七一年に前橋市で事件が起きたのです。奇妙なのですが、この犯人は八人ぐらいの若い女性の殺害をしました。若い女性を車に誘って、人里離れた所に連れて行って暴行、殺害したという凶悪犯罪です。

この犯罪を報道した朝日新聞は、今から考えるとすごいことを書いています。今の朝日新聞では絶対ありえない。犯人を描くときに、大変な容貌差別的な報道をしています。この犯人に対して「てっぺんも後頭部もはげている。身長一六〇センチ、とりわけハンサムでもない。だが女なんて甘っちょろいとうそぶく」というのが見出しの横に書いてありました。これは一九七一年の記事でこんなことを書いていたというのは今では信じられないのですが、多分これを書いた人は、「この程度でどうしてもてるのか？ 俺のほうかと、よほど腹が立ったのではないかと思えます。非常に怨念がこもっています。」

この事件が本当に変でした。変というのは、もちろん車に乗って

いったのですが、大久保清はルパシカにベレー帽をかぶって、後ろの席に埴谷雄高の『死霊』という難解小説を、当初の柴田翔の『されどわれらが日々』を置いて、高橋和巳の小説を置いて、詩集も置いて、英語の本も置いて、フランス語の本も置いて、会話に外国語を混ぜて、大学ノートにはロシア語がいっぱい書かれていました。

多分、今こんなことをやったら、もう逃げていって、誘惑戦術にはならないと思うのですが、すごいと思えます。といっても、この大久保清という人は、向学心があつたわけではなく、定時制高等学校を一年ちょっとで中退しただけで、別に独学したわけではないのです。だから大学ノートに書かれたロシア語は全部、でたらめにロシア文字を並べただけだということです。多分、そういう道具立てが若い女性にもてるということ、したのではないかと思うのです。当時の週刊誌を読むと、「群馬県だから、こんなことは可能なのだ。東京ではだめだ」と書いてありますが、多分教養にあこがれたというよりも、若い女性にとつては、「そういう難しい本を読むくらいの人だから悪い人ではない」くらいに思ったかもしれない。それでも今から比べるとインテリとか教養というのが道具立てになるのが、すごいと思えます。これがインテリとか教養が輝いた最後の事件ではないかと思えます。

教養主義の没落

次は「教養主義の没落」です。大学紛争前後のマス高等教育です。

29

十

社会と倫理

高等教育進学率というのは短大を入れるかどうかというのがありますが、短大を入れると、一九六三年に、いわゆる大衆段階、15.5%になっています。

マス高等教育

四年制大学だけに限定すると、六十年代半ば以降に、マス段階、要するに15%を超えるとマス段階だといわれていますが、ちょうどその時です。つまり世界的にそうだと思いますが、大学紛争のころというのは、高等教育がエリート段階からマス段階になっていくときます。

私のところがぎりぎりくらいだったと思いますが、それまでは大卒者は会社に入るときに、学卒と言っていました。ところがこのあたりからだんだん学部を問わないようになりました。要するに大卒者も幹部職員ではなく、ただのサラリーマンみたいなことが進行していきます。大量採用になりますから、もうピラミッド的学歴別市場ではなくなりまして。大卒が少なく、高卒が多くて、中卒がより多い段階ではなく、逆ピラミッドみたいになっています。

大学ファースト・ジェネレーション

マス高等教育になって、いままでの大卒のイメージと違ってくる。

それからあの大学紛争が一つと、もう一つ重要なのは、大学ファースト・ジェネレーションの世代ではないか。つまり自分の父がほとんど高等教育を出ていない、せいぜい中等教育、このとき中等教育を出ていない人もかなり大学生になっています。そういう大学ファースト・ジェネレーションの世代が全共闘世代に非常に多かったですと思います。

大学知識人の文化貴族は大体二代目が多いわけですが、そういう文化貴族二代目に対する両義的な感情は強かったのです。そのような人になりたいが、なれないという感情が非常に強かったのではないかと思います。

丸山真男と吉本隆明

丸山真男先生が当時のことを書いた『自己内対話』に出ています。学生に取り囲まれて、「ベートーヴェンなんか聴きながら学問をしゃがって。そろそろ殴っちゃおうか」という罵倒が投げ付けられたことを彼が書いていますが、これも大学ファースト・ジェネレーションの感情とみると理解しやすい。自分たちの未来も、かつての大学生の未来ではないところを合わせて考えると、文化貴族というか、教養エリートへの屈折した感情と見ると、分かりやすい気がします。

そしてなぜ丸山真男ではなくて、吉本隆明にシンパシーを感じたかというのは、これも非常に分かりやすい気がします。実際に丸山

教養主義の盛衰

先生と吉本さんは対極的な社会的軌道を描いています。

要するに、丸山先生は毎日新聞の論説委員の有名な丸山幹治氏の二男でした。府立一中、一高、東京帝大法学部を出て助手をして助教授、教授という絵に描いたような、まさしく学歴貴族ですが、吉本さんは東京の下町の船大工の三男に生まれ、学歴も旧制中学校ではありません。東京府立化学工業学校、それから米沢高等工業学校、東京工業大学。旧制中学校、旧制高等学校、帝国大学というルートではありません。正系対傍系みたいなものです。

だから、吉本さんの『丸山真男論』があります。理論以前に身体的な違和感ではないか、ぜんぜん齟齬があるのだろうと思います。だから当時の学生にとって、そういうファースト・ジェネレーションで未来を閉ざされた一種のプロレタリアート状態化された学生にとつては、丸山さんに代表される二代目文化貴族をモデルにした上昇型知識人の道ではなく、むしろ吉本さんのほうに共感を感じるのには不思議ではないような気がします。

結局、学生が丸山さんに代表されるような先生をつるし上げたというの、一種の教養主義の部分だったのではないかと思えます。マルクス主義的教養主義、それから教養主義的マルクス主義の部分ではなかったかと思えます。そういう意味で学生のほうから粉砕されたのです。

ビジネス知の変化

もう一つは、ビジネス知が変化したのではないかということです。学生のほうから教養主義は粉砕されましたが、ビジネス知のほうからは教養が無用化されるということです。どういふことかと言うと、ビジネス知で、必ずしも専門的な知はそんなにあったわけではないと思います。マルクス主義あるいは講座派の理論もよく生産力理論といわれますが、本来は社会変革の理論ですが、それが近代化社会の中にあつては、一種の技術知のようになって使われていく面が、マルクス主義や講座派の理論を学ぶことによつて、技術になるといふこともあつたと思います。ちょうど教養主義もそうではなかったかということです。

つまり、そこで学んだことは、外国語の知識や先進国の知識などによつて専門知になりえたのではないかということです。そういう実用的なもの、あるいは進歩的なものとして役立つたのだろうと思えますが、大学紛争の十年前ぐらいから経営学ブームと言われ、それから近代経済学がいわれてくるのです。

日本の会社はそのころ、企画室というようなものをたくさん作りました。社長室は社長がいる部屋ではなくて、総合企画です。アメリカのマーケティングやサーチやそういう手法・技法によつて経営を革新してきました。そういうのが出てくると、従来の単なる社会変革の思想だったり、単なる教養的なものであったりした知識が、専門知になることができなくなってくるのです。もう社会哲学やイデオ

社会と倫理

ロギーなどではなく、エコノミストやシステムアナリスト、また経営官僚の時代というスローガンが、六〇年代半ばあたりから非常に出てくるわけです。

大学紛争は、いつてみれば、大衆的サラリーマン像を鏡に教養知の特権的欺瞞性を、騒々しさの中で白日にさらしたわけです。サラリーマン社会は、テクノクラート型ビジネスマン、経営官僚を鏡に、専門知の転換による教養知の無用化を宣言したといえると思います。

農村性の消滅

もう一つは、これは野田先生が説得力ある形でおっしゃっていますが、農村性の消滅です。要するに教養主義は、後背地に貧しくて遅れた農村があつて、片方でまばゆい西洋文化があつて、その落差が輝かしいものにしたのだと思います。農村性も日本社会からなくなつていくと思います。実際に農村人口は減っています。六〇年に33%だったのが、六五年になると、農業以外の収入のほうが多いという第二種兼業農家が専業農家を追い越したわけです。しかも農村に行つても耐久消費財が普及して、だんだん格差がなくなつてきています。これはいろいろな意味で基底部の変化です。このあたりから、大衆と知識人、都市と農村という従来の二項対立が崩壊してしまふということです。

大学生の書籍購入シェア

実際に大学生の書籍購入シェアは非常に減ってきています。いつから大学生が本を読まなくなったかについては、『岩波新書の五〇年』を読んでいると、編集者は「今までは大学生を読者としてと考えていたが、なんとなく七〇年ごろから、学生の読者が減つたやうな気がする」と書いています。

うちの助手をしていた人が、大学生の書籍購入シェアを当時の資料で計算したことがあります。六四年と九四年を比較すると、六四年のときの全体の書籍購入の短大生・大学生のシェアは32%でした。つまり本を買つたうちの三分の一は、当時は短大・大学生でした。ところがそれから三〇年たった九四年に調べると、短大生・大学生の書籍購入シェアは8%で、四分の一に減つたことが、彼のデータの再分析で出ています。四分の一に落ちていたとはいっても、大学生数は二倍くらいに増えているから、六四年から比べると九四年の実質シェアの落ち込みは八分の一になります。

七〇年代から八〇年代に衰退

大学生が本を読まなくなったのか、大学生以外の人が昔より本を読むようになったのかは、どちら側から考えるかにもよりますが、いずれにしても、六〇年代は大学生が本を読む人たちだったということだと思えます。

+

教養主義の盛衰

この衰退は、データを省きますが、読書調査を再分析すると、大学によって違います。私が関西大学を見たときには大体七〇年代初めに教養主義が衰退し始めました。六五年の時には、総合雑誌を三人に一人くらいは読んでいたというのはすごいことだと思います。同じ大学で七〇年代になると、もう『中央公論』も『世界』も『エコノミスト』も出てきません。本をあまり読まないという状態が、七〇年代初めに起こっています。このころに私はこの大学に就職して、大学が大衆化するというのがわかりました。

第二次適応とレジャーランド大学

それから京都大学に行ったのですが、京都大学もしばらくすると、だんだん大衆化してきたので、大学によってタイム・ラグがあると思います。言ってみれば、全共闘世代は大学の理念とか教養主義にあこがれていた面もあるから、一種の家庭内暴力みたいな運動だったのではないかと思います。

七〇年代以降の日本の、特に大きな私学を中心として起きた教養主義の衰退は、当時はこれを「しらせ世代」と言ったと思いますが、ポスト全共闘世代です。そしてこれは最初から本なんか読まないのだから、家出世代です。家出だけでも、大学卒業の資格だけはほしいというのだから、家出ではなく、家庭内別居です。「教師は教師で勝手にやれ。そのかわりうるさく言うな。四年間いるのだから、最低のコストで最大限楽しんで大学を出たい」という、いわゆるアー

ビング・ゴフマンのいうセカンドリー・アジャストメント(第二次適応)ということで、組織本来の目標と違って、ずらして適応していくということです。その後レジャーランド大学と言われますが、これはまさにセカンドリー・アジャストメントだと思います。四年間いるのだから軋轢を起こさずに最小限の努力で最大の満足感上げて、しのいでいくということではないかと思えます。

京都大学のデータを見ると、思想書、教養書がよく読む本から減って、趣味本や漫画が増大してくるのが八〇年代です。それと対応して、総合雑誌は売れなくなります。『中央公論』がどれだけ売れたかを、実際はわからないようですが、聞きました。六〇年代は『中央公論』が一番売れたのかもしれませんが、実際の販売部数で十五万部以上ありました。大学紛争のときに少し盛り上がりました。大学紛争は家庭内暴力みたいなものがあつたと思えますが、七〇年代に一〇万部を切って、八〇年代は八万部から七万部となり、九〇年代は六万五千部、現在はもっと少ないのではないかと思います。

総合雑誌はある種の教養共同体、知識人の公共圏みたいなものですから、それが縮んでしまいます。だから、そのあたりから知識人論が影を潜めました。学生論も影を潜めて、若者論が出てきました。これは学生だけではなく勤労青年も一緒になる状態です。だから、よく読まれている本や雑誌は、一般の順位とそんなに変わらなくなり始めたのではないかと思えます。

ここで注意しなければならないのは、教養主義といっても、実際の数からすると教養主義みたいな学生は、どう考えてもそんなに多

+

+

社会と倫理

くはなかったと思います。私自身も当時のことを考えると、あまり本を読まないで、公務員試験だけはがんばるような学生もいました。いつの時代でも実利型など、いろいろいます。先ほど総合雑誌が実際は三割とか二割読んでいたと言いましたが、そんな程度ではないかと思えます。政治の支配と同じで、小党分立であっても相対的な多数派がヘゲモニーを握るわけですから、教養主義的な学生が二割も三割もいれば、これはヘゲモニーを握ることはあると思います。

もう一つは、内部の相対的多数だけではなくて、努力を良ししたり、人格主義、草の根教養主義、修養主義などは外部の学歴の高くない人たちにもあり、同時に、教養が進歩的・実用的な機能を持つという人々の信頼感があると、キャンパスの中で二割であっても三割であっても、規範文化のようになっていくのではないかと思えます。それがいまや相対的多数派でもなくなり、非常に少なくなってきています。

それから、外部に支援文化がなくなってきました。苦労人物語とか人格を形成するとか、あるいは草の根教養主義みたいなものが高くなってくると、それは非常に弱くなるのではないかと思えます。その拳句が、いまや教養難民みたいになって、知のオタクみたいになってしまうのです。こうなると悪循環を起こすのではないかと思えます。プレステージがあると非常に優れた子が教養主義派のものを構成しますが、マイノリティになると、優秀分子がこういうところにリクルートされてこなくなります。

モテないのは難しいことを知っているから

学生から聞いたのですが、「自分たちが女子学生にモテないのは難しいことを知っているから」と言っているようです。僕は反対だと思えます。教養主義だからモテないのではなく、それはもともとモテないだけの話です。

教養主義の復権はカッコいい人たちがやることです。そうすると、それにあこがれて、なるのです。そういう意味で期待が持てるのは、優れてカッコいい教養主義的な女子学生です。女子学生が難しい本を読んでいても、変なやつだとはあまり思いません。男の子も、カッコいい人がなると復権の可能性があるのではないかと思えます。

中間文化社会から新中間大衆社会

まとめです。加藤秀俊さんが「中間文化社会」だと一九五七年に書いています。要するに、昔は真ん中の文化が弱くてひょうたん型だったのが、真ん中の文化が増えてきょうちん型になったという有名な論文です。その具体例として、新書やトリスパーがはやつたことです。高くもなく、焼酎でもなく、まあまありっちな雰囲気味わえるという中間文化社会を言ったわけです。

それから、村上泰亮先生が一九八四年、「新中間大衆社会」と言いました。今の日本の中流社会は、いわゆる新中間階級ではない。そうかといってエリートに指導される単なる大衆というわけでもな

+

教養主義の盛衰

い。その中間みたいな社会であると言われたのです。

私はこう思います。中間文化社会はある種のスノビズムみたいなものがあります。たとえば新書だとかトリスパーというのは、ハイカルチャーの模造をしたいという、よくも悪しくも背伸びするというのが中間文化ではないかと思えます。村上先生の「新中間大衆社会」という言葉は有名になったけれども、意味するところがいまひとつ私にはわからなかったのですが、加藤さんの言う「中間文化」と違つたことを表していないだろうかと思いました。これは、背伸びするところがありません。いわゆるオルテガの大衆社会に非常に似ています。オルテガは、「自分が凡庸なのに賢いと思うのが大衆だ」とは言っていないで、「凡庸で何が悪いというのが大衆だ」と言っています。新中間大衆社会は、なにかそういう気がします。ですから、加藤さんの中間文化はスノビズムのようなものがある中間文化だと思えます。

おわりに 教養・きょうよう・キョウヨウ

私が一番不得意なのは建設的な意見ですが私個人の力ではとても及ばないので先生方のお話も聞きたいと思つていきます。

一つは、今のキャンパスにも一種のカタカナの「キョウヨウ」主義みたいなものはあると思うのです。漢字の教養主義は終わりだと感じたのは数年前です。旧制高校のことを授業でやっている女子学生が来て、「なぜ、昔の学生は難しい本を読まなければならぬと

思つたのか？」と聞きました。そう言われればそうです。「なぜ読書で人間形成するのかわからない」と言うのです。私としては自明化していることを聞かれたわけです。非常に率直過ぎる質問でした。

今の学生は、人間形成という野暮な言葉を使わなくても、大学で自分の人間形成をするという事はわかっていると思えます。ただ、それがなぜ読書なのかということ。つまり、ビデオでも漫画でもサークル活動でも友人との付き合いでも、ファッションも知識もギャグも全部、そういうことにかかわるのではないかと思つておられると思います。読書はせいぜい one of them だと。そういうコンセプトがあるのではないかと思えます。あえて言えば、カタカナのキョウヨウではないかと思えます。先生方が「学生に教養がない」と言うときには、漢字の教養で言いますが、学生はカタカナで「先生のほうがキョウヨウがないのではないか」と思っているのではないかと思えます。

キョウヨウは適応戦略

そういうカタカナのキョウヨウも確かにいいところもあると思えます。確かに旧制高校的な教養主義は、一つは読書中心主義で、もう一つは「栄華の巷を低く見て」のように大衆と世間を外部化した特権的な学生文化だったということは否めないと思えます。

学生が考えるカタカナのキョウヨウが評価されるのだらうかと思えますが、キョウヨウは世間並みと普通に寄り添うキョウヨウでは

社会と倫理

ないかと思えます。要するに、漢字の教養主義が大衆文化との差異主義だとすると、カタカナのキョウヨウ主義は大衆文化への同化主義みたいに私には思えます。サラリーマン文化への適応戦略みに見えるわけです。

かつての教養主義や人格主義は、今から考えると悩みを悩んでいたようなところがあると思います。悩むことはいいことで、無理して悩むというようところがあつたと思います。ところが今の学生は、悩むことを咎（とが）のように思ってしまうています。悩むのは自分が何かおかしいのではないか、それはどうして出てくるのかという、過剰な現実適応の学生文化だと私には思えてしょうがありません。

適応・超越・自省

次は、社会学者の井上俊先生の「文化の三つの機能」です。確かに、人間の環境への適応を助ける実用性が文化の最大の機能だと思えますが、効率、打算、妥協などの実用性を越える働きも文化の中にあつて、それを超越といい、これを理想主義といつてもいいわけです。また、実用や理想だけではなく、一種の自省も必要です。妥当性や正当性を疑う作用、自問や自省の働きも必要です。文化の自省機能もあつて、自省機能は理想主義に対しても懐疑の矢を放つわけですが、この三つの機能のバランスが取れているときに、文化のダイナミズムがあるというのが井上説です。

井上さんは、七〇年代以降は文化の適応機能が肥大したのではないかと、超越や自省の作用が衰微したのではないかと、文化の一元化をいつていますが、私はカタカナのキョウヨウという気がします。

前尾繁三郎

時間がないのでしよりますが、旧制高等学校の教養主義は、前尾繁三郎さんの例で見ると、超越や自省の働きをしたのではないかと思います。

ノン・エリートの「きょうよう」と矜持

もう一つは、これからの教養を考えると、教養は旧制高校だけということにすると、ノン・エリートの教養みたいなものが隠れてしまふと思えます。農民や漁師の生き方は大事なことです。それを「きょうよう」とひらがなで言いたい気がします。ノン・エリートの生き方やプライドは、ついこの間まで日本社会の中であつたと思います。職場の生き字引とか、お天道様に恥ずかしいようなことをしないと、そういう矜持があつたと思うのですが、それを拾い上げないと、いけないと思えます。これからの教養は、「教養」、「きょうよう」、「キョウヨウ」の三つではないかと思えます。

+

教養主義の盛衰

読書・身体・語らい（社交）

一つだけ言って終わりにします。「語らい」が大変重要ではないかと私は思います。教養主義をずっと見てくると、最初は社交というか、先生と付き合ったりする中で出てきます。それがだんだんマニュアル化されて、教養主義みたいになってきて、本を読むようになってきたのは、もっと後のことです。もともとはケーベル先生や岩元禎先生もそうだし、そういうところではしゃべりながら、つちかったのではないかと思います。庶民のひらがなのきょうようも、そういうふるまいや、何かしゃべったりする中で、一緒に仕事をする中であつたのではないかと思います。

これからの教養は、「語らい」や、修養にあつたような「身体」、それと一緒に「読書」も考えていくことではないかと思えます。

時間が十分なかったので、前尾さんのことは省きましたが、私の話は以上です。また、先生方からご意見などがありましたら、教えてくださいたいと思います。

+